

とがくし山絵巻 語り台本（短縮版）

（語りの部分は調子をつけて語るが、口で困った部分は絵の説明の部分なので説明調になり、時には気楽に観客と話を交わすような調子で、観客との受け答えも可。適宜絵を指し示すとよい）

これは信州は戸隠、戸隠は元別当家の勸修院、いまの久山家に伝わる「とがくし山絵巻」の物語でございます。

いまを去ること1300年ほど前、元正天皇の御代。天下は太平に治まって、その証でございましょうか、美濃の国に不思議の泉が現れました。里人がこの泉の水を飲めば疲れもとれ、家に待つ年寄りに飲ませれば、不思議や白髪変じて黒髪となり、足も軽くなったのであります。

帝は大層よろこばれ、（絵の勅使を指しながら）勅使を使わしてこれを見分、里人の親を思う心に感心なされて年号を養老と改められました。世に言う養老の滝でございます。



（適宜、指し示しながら）この絵は帝のお使が、飲めば若返るといふ不思議の泉を見分しているところでもあります。先頭の勅使はなかなか立派な沓を履いていますね。笠を持つ後のお供の方は裸足で、これが身分の差というものです。帝のお使いは輿にも乗ってくるのですね。

帽子にも差があります。勅使のかぶり物は冠で、白い服を着たお供は烏帽子です。勅使の後ろの次に偉そうな人の帽子も烏帽子ですがちょっと種類が違います。なお、中央の弓矢を持った二人が隨身で、神社の随神門によくその像が置かれています。

前の人たちはちゃんと前を向いていますが、後ろの人たちはおしゃべりをしているようです。現代の集会でもよく見られる場面ですね。

かくて泰平の御代も過ぎていったのでありますが、満れば欠くる世の習い、ここに人々の煩いの種のなることが出来いたしました。

信濃の国、戸隠山に不思議の鬼神住んで、夜昼となく麓へ出ては人々を悩まします。

親をとられて子が嘆き、夫を取られて妻が嘆く。人々は家に籠もって田畑も耕さない有様。

困り果てた人々は都へと訴えに出ました。（絵を指しながら）驚かれた帝は、文武両道の「き

「^{おとど}ひの大臣」を召し出されます。そして「信濃の国戸隠山に鬼神の住んで人々を悩まし、行き来の人を^{ほろぼ}滅す事^{きつがい}奇怪なり。急ぎ^{なんじ}汝信濃の国に^{げこう}下向して鬼神を退治せよ」とお命じになったのであります。



(適宜、指し示しながら) この絵が「^{おとど}きひの大臣」が鬼神退治の勅命を受ける場面ですが、尊い帝の姿は御簾の中で見えません。その前に平伏しているのが^{ないだいじん}内大臣です。これが御殿の上にいる^{てんしょうびと}殿上人。「きひの大臣」はとといいますと、庭の真ん中に控えていて、その後の八人が家来の武士です。これらの武士は建物には入れないで地面に控える^{じげ}地下の人です。帝が「きひの大臣」に命じたといっても直接話しているのではありません。帝から内大臣に、内大臣から「きひの大臣」に伝えられます。この絵は身分の序列が分かって興味深いものです。ここでも後ろの人たちはおしゃべりをしているようです。

内大臣の着物の裾が長くて階段にたれています。裾といい、身分の高い人の衣服です。殿上の左の欄干から垂れているのも裾です。長すぎるので欄干に掛けておくなど面白いですね。

なお、「きひの大臣」といいましたが、「おとど」とは大臣のことです。でも、これはちと作者の時代錯誤で、武士の頭領、そうです、平の清盛や源の義朝のように、宮中で新しく力を持ち始めた武士のような者を思ってください。

さて、勅命を承った「^{おとど}きひの大臣」は、日頃信心している長谷の観音さまに^{がん}願を掛け、主立った^{みょうとう}郎等二人を中心に五十余騎を引き連れて都を出立いたしました。養老二年九月中旬のことです。



(適宜、指し示しながら) これは信濃の国に向かう「きひの大臣 (おとど)」の一行です。前の黒っぽい馬に乗るのが大臣でしょう。その後ろの馬に乗った二人の武士が、主立った郎党二人ということになります。ここでも先駆けの二人は裸足です。帽子はみんな烏帽子ですが、種類が異なるようです。なお、「難波歩き」をしているのが分かりますか。「難波歩き」、やってみましょうか。

さて、一行は、瀬田の橋を渡り、野路の篠原を過ぎ、夜を日に継いで信濃の国に急ぎました。

そして戸隠山の麓に着きますと、大臣は、大勢では鬼神が恐れて出てこぬかも知れぬと、家来二人を連れて主従三人、後の者は麓に残して、山に分け入ることにいたします。



(適宜、指し示しながら) 先頭の大臣は緋緘の鎧を着けていますが、その上に薄衣をかぶっています。女に変装して鬼神を安心させようという策略です。ここにも松めいたものや川が描かれています、山の中を表す約束事のようなものです。

さて、戸隠の山は、なかなか険しく深く、聞こえるものといえば峯の嵐と谷の水音。と、不思議や峰の方に人の声が聞えたので、近寄ってみれば美しい女房が二人、涙を流しております。大臣は「鬼神が我等を謀らんとて女となって出てきたのであろう」と警戒しますが、女達はこの山の者ではなく鬼神に連れてこられた麓の者で、鬼神の住処も知らないが、峯の彼方に酒宴をしている女房たちがいる、それに尋ねてみよ、とのことでした。



(適宜、指し示しながら) この絵も例によって川あり、松ありの山の中ですが、紅葉が加わっています。この絵巻は、もともとは「紅葉狩」という謡曲をもとにしているので、紅葉の季節なのです。女房たちが酒宴をしているといいましたが、後で出てくるようにもちらろ紅葉見物の酒宴です。あ、里人であるこの女の人も裸足ですね。

さて、峯をたどってみれば、たしかに気高い女房六、七人が幕を打ち回し屏風を立てて酒宴をしております。

大臣たちを見かけると女房、「都の人ではございませんか。これはお懐かしい。どうぞこちらへおいで下さい」と酒を勧めます。

大臣は盃を傾けながら、「この山には鬼が住むと聞いたがどこにいるのであろう」と話しかけます。

女房達は、「たしかにくしょうだいおう九生大王という身たけの丈一丈の鬼とそのけんぞく眷属がおります。いまは留守をしておりますので、私たちはその隙にこうして楽しんでいるのです」と申します。

このようにうち解け顔に酒を勧めますので、主従三人よい気持ちに酔っぱらって、岩を枕にしぼし寝込んでしまいます。



(適宜、指し示しながら) この絵を見ますと先ほどの二人の女に比べて、十二単を着たお姫様みたいな立派な上臈たちですね。左の三人の派手な服の女達が主人格で、後ろ向きの地味な五人がお付きの者といったところでしょうか。主人がどうぞと左手をあげ、実際にお酌をしているのが侍女でしょう。ちようし銚子とかながえ長柄といいます。四角いふたつの台は食器を

載せる衝重ねです。それはともかく、このような女達が山深い山中で紅葉狩の酒宴というのも妙ですし、大臣たちは女に化けたはずですのに見え見えなのも妙ですが、お話として勘弁してください。

さて、紅葉狩をしていた女房たちは実は鬼の化けたものでした。そして大臣たちが酔って寝てしまったのを見届けると、「しすましたり」と鬼の姿を現し、九生大王の元へと知らせに急ぎます。(次の絵の左側を示しながら)

大王は「でかした出来した」と眷属を引き連れて三人のもとへと向かいます。

大臣ら主従三人危うし、と思われましたが、日頃信心する長谷の観音さまが夢枕に現れ、危機を知らせるのです。おかげでカッパと起き上がった三人、太刀を抜きはなつて(次の絵の右側を示しながら)今やおそしと鬼神の現れるのを待ちうけます。



(適宜、指し示しながら) 左が九生大王の宮殿で、市松模様の床は昔の日本にはないので、これによって普通の御殿とは異なって異界めいてくるのです。人間の宮中とは異なって鬼たちもリラックスしていますね。

絵の真ん中に小山をひとつ置くことで場面を描き分け、左が大王に報告する鬼たち、右が観音様の知らせで酔いからさめて待ちかまえている大臣ら三人です。どの場面でも大臣が先頭に立っているのは偉いものです。もう女に化ける薄衣は身につけていません。

(適宜、指し示しながら) 続いて戦いの場面です。この絵巻のクライマックスです。真ん中あたりの紅葉によって右と左に分かれています。右が戦いの最中の場面、左がいよいよ鬼神をやっつける場面で、左右のおとどたちは、同じ登場人物はですが、時間差で描き分けられています。鎧の色は三人とも違っていて区別がつくようになっています。



さて、現れ出でたる九生大王、もとより神通力を得たものでありますからおそろしい風を吹かして火を飛ばし、岩を崩し古木を倒して暴れます。この時、何所^{いずこ}からともなく天童が現れ（指し示す）黒鉄の盾^{くろがね}をもって（指し示す）大臣ら三人の味方をします（指し示す）。これを見て大王、おおきに腹を立て「憎^{にく}つき奴^{やつ}ばら、いで手並みの程みせん」と大臣に飛びかかります。大臣むんずと組み、上になり下になり大王と戦うところに、二人の郎等駆け寄って鬼の首を搔き落とせば（指し示す）、この首、虚空^{こくう}に飛び上がり口より火炎をはきかけます（指し示す）。

と、何所^{いずこ}よりか鷲^{わし}、熊鷹^{くまたか}が現れ（指し示す）、舞い上がる鬼の首をけりに蹴^くって深い谷の底へと木^こっ端^{ぼみじん}微塵^{びじん}に蹴落^くとしました。

左右で時間差のある場面を描き分けているといいましたが、鬼の首の場面では、下の（指し示す）と、上（指し示す）とで場面がかき分けられています。現代の漫画表現に取り入れてもいいような描き方ですね。

さて、三人はその夜は山中にて明し、翌朝、鬼の首を持って出立^{しゅったつ}いたします。一方、麓に残った人々も、大臣は何所^{いずこ}にと山中に探しに入り、双方無事に出会って麓に出たのであります。



（適宜、指し示しながら）この絵は、大臣達が山から戻ってくる場面です。鬼の首をかっいでいますが、首は鷲や鷹に蹴^くられて微塵^{びじん}になったはずで、ちょっとおかしいですね。でも、担いでいる方が格好^{かっこう}がいいです。右上の家も鬼の御殿ですが、すぐそこにあるのでは

ありません。山の絵が間に入っていますので、要するに離れた別の場所です。

信濃の国の里人は、このことを聞くやいなや、「それにしても有り難いことだ」と大喜び。都へもかくかくと使いを出せば、人々は「さあ、末代までの物語に見物しよう」といって馬・車・徒歩・裸足の人々と我も我もと迎えに出るのでした。



(適宜、指し示しながら) なかなか素晴らしい凱旋の場面です。鬼の首もつり台に乗せられています。牛車も出ているようですね。左上に子供めいた者がいます。帽子を被ってはいません。まさに子供だからで、大人は帽子が常識でした。行列の二番目に帽子無しの大人が居ますが、鉢巻きは下級武士の戦闘スタイルです。その前の先頭の武者は烏帽子の上から鉢巻きです。実はかぶと兜を被った大臣も烏帽子、鉢巻きをし、その上に兜を被っているのです。先頭の武者は例によって難波歩きです。

さて、宮中からは「そのまま参内せよ」とのご命令。「戸隠山のこと、くわ委しく物語れ」との帝の仰せに、大臣はかたじけ忝なくも御簾みす近くに差し寄ってかくかくしかじかとくわ委しく申し上げれば、

「ゆゆ由々しき手柄なり」といって、大臣には信濃の国を下され、二人の郎党は少将に任せられたのです。



(適宜、指し示しながら) この絵でも帝は相変わらず御簾みすの中ですが、人物の位置が面白いです。鬼神退治の勅命を受ける最初の絵からすると武士達が一段階づつ位置が前に進んでいます。大臣は殿上人になったようで、じきょう直答しています。郎等達も御殿近くに控えています。平清盛の父で、武士にして始めて昇殿を許された忠盛みたいに、武士の台頭を思わ

せまず。

かくて、大臣は長谷の観音さまに多くの寄進とお礼参りをし、二人の少将を信濃の国に総政所として遣わします。

二人が信濃の国にいたれば、人々はこの国が安泰であるのもこの人々のおかげであるとさまざまな贈り物をもって挨拶にあがりました。二人は思いのままに家造りをし、栄えたとのことです。



(適宜、指し示しながら) 国司代理の館としてはちょっと豪華すぎるお屋敷のようではありません。進物は鶴やらタイやら素晴らしいものです。真ん中に盆栽のような妙な物がありますが、洲浜^{すはま}といって海岸を模した物で、いろいろなお祝いの時に据えられます。

右下隅の下人は、頭が月代^{きかやま}になっています。実は絵巻が描かれた江戸時代の髪を結っています。江戸時代は人々が帽子を被らなくなった時代です。そのかわりにいろいろな髷が発達したようです。明治になって斬髪令で髷が無くなるとまた帽子が復活したようですが、現代ではどうでしょうか。

ところで、鬼の首はというと、帝の命によって七条河原に晒^{さら}されました。まことに帝の御威勢目出度き限りであります。

以上、とがくし山鬼神退治の物語、ご静聴ありがとうございました。